宮城山岳

第 27 号

2023 年 5 月

冬の泉ヶ岳

仙台市宮城野区岩切七北田川河川敷より望む

Miyagi Section of The Japanese Alpine Club

目　次

１　巻頭言・・・・・・・・・・支部長　千石信夫・・・・・・・・・・・２～３

２　宮城県の山地および丘陵地における風力発電事業計画に対する　公益社団法人日本山岳会宮城支部の見解・・・・・・・・・・・・・・・・・　３～５

３　2022 年度の山行記録(共益事業山行・公益事業山行)・・事務局・６～２１

４　2022 年度 山行事業以外の宮城支部活動記録・・・事務局・・２２～２７
(全国山岳古道調査ほか)

５　2022 年度 宮城支部以外の行事参加記録・・・・・事務局・・・・・２８

６　紀行・随筆・エッセー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９～３９
「九度山(高野山)町石道を訪ねて」・・・・冨塚和衛
「熊野古道を訪ねて～小辺路を行く～」・・冨塚和衛
「黒伏高原の山　白森」・・・・・・・・・・三宅　泰

７　新会員・新準会員・新支部友　自己紹介・・・・・・・・・・・３９～４２
「山で一期一会を」・・・・・・・・・・・・・八尾　寛
「はじめての一歩」・・・・・・・・・・・・・白井　浩

８　新刊紹介：三宅　泰 著「オボコンベ - あの日あのときの山」　４３～４４

９　宮城支部 定例事業の概要・・・・・・・・・・事務局・・・・　４４～４５

10　宮城支部 収支会計報告 ・・・・・・・・・・ 事務局・・・・　４６～４７

巻　頭　言

支部長　千石信夫

創立 120 周年記念事業の古道調査が進んでいる。古道に関連する資料など見ているうちに、50 年前の創立 70 周年記念号『山岳』が目に留まった。先人の、山に対する思いや向き合い方が述べられていて、懐かしい時代に思いを馳せることになった。

その『山岳』に元会長である槇有恒の創立 70 周年記念講演「山への回想」が掲載されています。

槇有恒は、その講演のなかで―「登山におきまして、未知の山頂に立つとか、未踏の岩壁を登攀するとか、あるいは目指した山の頂に立つとかは、大きな目的ともいえましょう。しかし、もしこの目的への希求だけが登山のすべてであると申すならば、山との関わりを忘れたものと言えましょう」と語っています。そして「その登山者にとって外的な功名手柄の評価も貴重なものであるに違いはありませんが、心底に把握する幸福は、厳しい登山に己の全力を傾倒して得た自身力ではないでしょうか」と述べられております。登山は終始自然との関わりがあり、登る山の科学的な知識や登る時の気象上の要因とか、医学上の知識など、総合的な技術によって自分の力量に相応しい山を選ぶことだと説いております。登山というものを極められた槇有恒の言葉は、まさに知識は力なり、あらためて山に向き合う姿勢を正される思いでした。

さて、先般 4 月 29 日には久しぶりに対面での支部総会が開催されました。総会議案すべて承認をいただき、新役員体制にて活動することとなりました。今後ともご支援いただきますようよろしくお願いいたします。

新年度の主な公益事業では、山岳気象予報士の猪熊隆之氏を招き、一般の登山者も対象にした「山の天気ライブ授業」を開催いたします。あらためて山岳気象について学び、安全登山に寄与したいと思っております。共益事業では会員同士の交流がさらに活発に行われるよう、山形支部の皆さんとの懇親会も企画しています。

自然保護活動については、一昨年から検討を重ね、宮城県内における風力発電事業計画に対する宮城支部としての見解をまとめ、この『宮城山岳』及び宮

城支部のホームページにて発信することにしました。

最後に、新年度からも会員、準会員、支部友の皆さまとともに、自然に対するさまざまな知識を学びながら、登山を通じて皆さまと楽しく交流したいと考えております。

宮城県の山地および丘陵地における風力発電事業計画に対する公益社団法人日本山岳会宮城支部の見解

見解作成までの経緯について

現在、宮城県の山地および丘陵地の各所で問題となっている風力発電事業計画について、(公社)日本山岳会宮城支部は2年ほど前の2021年10月の役員会でこの問題が指摘され議論されて以来、自然保護委員会において現地調査や問題点の検討が進められてきました。昨夏2022年8月の役員会に「支部としての見解」として素案が提出され、内容の検討、今後の扱い方についての検討が加えられた結果、ほぼ原案通り、それに近年の動きを加筆して内外に発表することとしました。

支部会員はもとより、この問題に関心を抱かれる多くの方々よりのご意見などもいただき、私たちの自然保護活動に資していきたいと存じますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

2023年4月

公益社団法人日本山岳会宮城支部　支部長　千石信夫

同自然保護委員会　柴崎徹、宇都宮昭義、高橋二義

私たちの見解

公益社団法人　日本山岳会宮城支部

私たちの公益社団法人日本山岳会は、創立以来120周年近くの歴史を刻む中で、国内国外の登山活動と同時に、山岳自然の保護保全をも重要な活動の柱にすえ、活動を展開してきました。私たち公益社団法人日本山岳会宮城支部も、この伝統を引き継ぎ、様々な登山活動を通して、ふるさと宮城のかけがえのな

い山岳自然が私たち人間の不用意な開発行為によって、その自然の価値が損なわれることのないよう注意を払い、微力ながら保護活動を続けてまいりました。

ところが近年、宮城県各地での登山活動中、これまでにない風力発電事業計画の試験地にたびたび遭遇するようになり、周辺の自然にそぐわない異様さと大きさに驚かされるとともに、巨大な風車が林立する姿を想像して危機感さえ抱いてきました。試験地として私たちが確認しているのは、加美町北西部の箕輪山西、同町北部の松森南、大崎市と加美町境の鳥屋山、白石市越河西山、同じく同市鉢森山北、七ヶ宿と白石市境の大梁川山北など 10 ヶ所ほどの位置です。様々な情報を総合すると、山地帯を中心に試験地は宮城県の全域に及び、北上山地や阿武隈山地の丸森にまで及んでいます。その中には自然公園地域さえも含んでいるようです。

現在、これらの試験地や風力発電事業計画のうち、川崎町立石山一帯および大崎市川渡六角牧場などの事業は白紙撤回されることになりましたが、宮城県の他の多くの地域では、今後も引き続き風力発電事業計画が頻発することが予想されます。

このような宮城県の状況を踏まえ、山地および丘陵地における風力発電事業計画における問題点を、次の 4 つの観点から指摘し、この問題に対する私たちの見解を述べたいと思います。

1. 山地や丘陵地の山頂部や主稜線上に設置される巨大な風車や風車群は、山々の自然に代って最も大事な高位の位置を占有し建設される。このことは山地や丘陵地全体の自然景観を著しく低下させ、山地などそのものの山の魅力、資質を失わせることになる(高位にある人工工作物による景観阻害)。
2. 風当りの強い山地や丘陵地のほぼ山頂部や主稜線上に設置される巨大な風車や風車群は、その高さ故に可視領域が一段と広がり、より一層離れた周辺地域からも、その異質性が可視されるようになり、地域景観の自然度を著しく損なうことになる(人工工作物の可視領域の拡大による山地や丘陵地の自然景観の逓減)。
3. 各風車ごとに必要とする敷地の造成、保守管理のための道路の設置は、山地や丘陵地の自然地形を破壊することを免れず、斜面の崩壊や土石流など、様々

な災害を誘発する原因になるとともに、地域の水質悪化をも招く怖れがある。さらに地域景観の低下にも影響する（建設敷地および管理道路による山地地形の破壊と災害誘発および自然環境の悪化）。

4. 風車の稼働によって発生する低周波音および振動は、人間ばかりでなく動物の生息環境にも大きな影響を与えると考えられること。特に風車の回転翼は、飛翔する生物の命を脅かす障害になること（風車による生物相や生態系への影響）。

以上のように、山地や丘陵地の高所における風力発電事業は、その地域の自然環境に重大な影響を与え、地域の自然景観を著しく低下させることは必至と言わざるを得ませんし、さらには様々な災害を誘発する原因にさえなりかねません。このことは私たち登山を志す者だけでなく、地域の人々にとっても大きな問題であることを示しています。自然エネルギーのひとつに位置づけられる風力発電事業ですが、その事業のために山地や丘陵地の自然を失って良い筈はありません。

東北地方の山々や宮城県の山々は、公園地域や保全地域のまだ及んでいない山地や丘陵地であっても、すぐれた自然を保っている山々が多く見られ、たとえ低い丘陵地であっても風力発電にはそぐわない地域が広がっています。

私たちは多くの風力発電事業者が、東北地方や宮城県に安易に事業の候補地を求めて来る現状に大きな危惧を抱いております。

東北地方の自然、なかんずく宮城県の山地や丘陵地の豊かな自然、美しい自然が、この度の風力発電事業計画によって失われたり、損なわれたりすることのないように、私たちが自然保護活動の一環として、より一層この問題を注視していくとともに、風力発電事業者に対し、関係する行政機関による事前の適切なご指導を切にお願い申し上げる次第です。

2022年度　山行記録

【共益事業山行】

（１）春山山行（虎捕山）

実施日　令和4年4月17日（日）

山　名　虎捕山（標高705.3m）、福島県相馬郡飯館村佐須字虎捕

コース　山津見神社駐車場（10時10分）→[約480m]→手水舎（10時40分）→[約260m]→金華山（10時55分）→[約200m]→虎捕山頂上（三等三角点：11時10分～30分）→金華山（11時45分）→手水舎（12時00分）→山津見神社駐車場（12時20分）～昼食～現地解散

参加者　会員＝中里政信（L）、高橋二義、千石信夫、鳥田笑美、草野洋一、佐藤昭次郎、千葉正道、支部友＝村上敏郎、佐藤富士子、多田孝徳、鳥田伊志、ゲスト＝能勢眞人、千石裕子　以上13名

虎捕山の麓にある山津見神社の駐車場に10時集合、いつものように皆さん早目に集合するのが通例だが、今回は集合場所を間違えた人もあって若干集合が遅れた。

駐車場はかなり広く、参拝者が多い神社なのだろう。調べてみると、全国的にも珍しい狼信仰の神社で、神社の前には狼の像が鎮座している。神社内の天井には美しい狼の絵が見られる。虎捕山の山名には古い伝説が残されている。平安時代に遡り、この地に橘墨虎という凶賊がいて、民家を襲い財物を強奪し住民から恐れられていた。奥境鎮守のため下向していた源頼義公は、部下に命じ墨虎を捕らえたということから虎捕山と呼ばれたそうだ。

当日は天気も良く、駐車場では登山客がたくさん登山準備をして賑わっていた。今回の山行担当は久々の中里会員が、寅年に因んだ珍しい山を紹介してくれた。そしてまた、昼食を用意するという最近では珍しい企画であった。

予定通り山津見神社駐車場を出発、神社に参拝し神社の右側を回り登山口となる。イノシシ対策なのか、金網のフェンスが廻らされて、その入り口から入山となった。しばらく歩くと手水舎に着く。それを過ぎると、花崗岩の大きな岩がゴロゴロしたところに鉄梯子があり、予想外に注意を要する登りとなった。梯子を越えると奥の院にたどり着く。その上にある岩場の上に立つと、眺望が

すばらしい。西は吾妻方面の連山、北は霊山、東は太平洋、南は阿武隈山地の山並みが望めた。そこから山頂までの道は歩きやすい山道となり、山頂に到着。山頂は雑木林の中で眺望はよくない。一服して下山する。

駐車場では昼食が準備され、これまた珍しいホッキ飯が出された。皆、ビックリ！　そしてカレーうどん、スイーツまで出るフルコースとなった。お陰さまで思いがけない楽しい“お花見”山行となった。　〈報告者：千石信夫〉

（２）夏山山行（蔵王連峰）

実施日　令和４年８月 20 日（土）

山　名　蔵王連峰：後烏帽子岳～前烏帽子岳

コース　烏帽子スキー場→スキー場ゴンドラ→後烏帽子岳登山口→後烏帽子岳山頂→昼食→前烏帽子岳→烏帽子スキー場駐車場　解散

参加者　会員＝太田正（Ｌ）、千石信夫、加藤知宏、冨塚和衛、鳥田笑美、草野洋一、支部友＝村上俊郎、鳥田伊志、以上８名

スキー場手前・前烏帽子岳からの降り口に集合。9 時 10 分にスタートし烏帽子岳ゴンドラで山頂に向かうも、上部かもしかリフトが動いておらず、スキーコース脇の急坂を登る。

▲前烏帽子岳山頂

今回の登山で一番厳しい登りでした。我々は歩くのが趣味で、それを楽しめばいいのに、ここで文明の利器が使えないのは、はなはだ恨めしく思ったことでした。

リフト頂上から登山道に入り、少し登ったあたりから小雨が降り出し、風もあることから途中で昼食を摂り、休憩後に山頂へ。天気

は思わしくなかったが、山頂から西の眺めは良く、展望を楽しんだ後すぐに前烏帽子岳に向かう。

前烏帽子岳で記念写真等を撮り、一気に下ろうと意気込んだが、これが長い長い下りで休みながら、やっと駐車場の所まで戻りました。9.4 キロメートルの山行でしたが、山行日を挟んで前日は晴れ、翌日も晴れて下界からは山が良く見えました。“誰だ、雨男は！（自分かも）”と憤慨し、9 月 16 日（金）に天気が良いので、また後烏帽子岳に。コースは聖山平から股窪⇒ろうずめ平⇒後烏帽子岳の往復です。

遠刈田あたりから霧がかかって見通し悪くなり、また“雨男？”と頭をよぎったが、エコーライン沿いの澄川スキー場に着く頃は、雲の中から抜け出て晴れており、ルンルン気分で 8 時 45 分登山開始。

登山道は刈払いがされて気持ち良く、沢を幾つか渡り、山頂には 11 時 10 分頃到着。少し早いが昼食を摂り、屏風岳方面の原生林をぼんやりと眺めながら陽光の中､誰もいない山頂で静かな時間を独り占めする至福のひとときでした。腰を上げたくなかったが、雲が下の方から上がってきたため帰路につく。聖山平に着く頃はガスの中で、13 時 15 分にゴール。距離は 7.9 キロメートルでしたが、アップダウンもあり、前回よりは厳しく感じる仇討ち山行でした。

〈報告者：太田　正〉

（３）秋山山行（神室岳）

実施日　令和 4 年 10 月 1 日（土）

山　名　神室岳（1353m）

コース　笹谷峠（8：00）～トンガリ山（9：30）～山形神室（10：30）～神室岳（11：40）～山形神室（13：00）～トンガリ山（14：00）～ハマグリ山（14：30）～大関山（14：50）～笹谷峠着（15：30）

参加者　会員＝千石信夫(L)、草野洋一、細川光一、準会員＝佐藤翔太、支部友＝村上敏郎、山元町山歩き愛好会：今村貞行　以上 6 名

当初の日程の 9 月 23 日は、天候不順のため中止し、急だったが新たに 10 月 1 日に企画することにした。参加者は会員 3 名、準会員 1 名、支部友 1 名、ゲスト 1 名、計 6 名の参加者となった。

8 時笹谷峠に参加者全員が集合、駐車場は既に満車状態で登山者が多かった。

天候は朝から快晴となり眺望も素晴らしく、快適な滑り出しとなった。途中からは宮城側の眺望もよく、オボコンベなどが確認できた。

山形神室では村上さんがリタイアし、残り５人で神室岳に向かう。清水峠への分岐を過ぎ最低鞍部まで行ったところで、ゲストの今村さんは山形神室まで戻り待機してもらうこととした。残りの草野、細川、佐藤翔太、千石で神室岳を目指す。

▲仙台神室山頂

最後の神室岳への急な登りが辛く、正直大変だった。山頂からは月山、葉山、鳥海山も薄っすらと眺めることができた。山頂で昼食を摂り下山する。

山形神室では今村さんと合流し休憩後、下山。笹谷峠 15 時 30 分、無事下山。帰りは山形側に降り、途中の水場で冷たい山水で疲れを癒し解散とした。紅葉にはまだ早くこれからという日だったが、天候に恵まれ初秋の山を楽しんだ。

〈報告者：千石信夫〉

（４）厳冬期山行（鷹ノ巣山）

実施日　令和５年２月５日（日）

山　名　鷹ノ巣山（704.8m）　太白区秋保町馬場

コース　秋保大滝駐車場～車道～登山口～尾根～山頂・昼食～東尾根～枝尾根～駐車場

▲カンジキを履いて斜面を登る

参加者　佐藤昭次郎（L）、千石信夫、千葉正道、細川光一、草野洋一、遠藤幸壽、以上６名

昨年末に日本海側で豪雪での立ち往生などの話題がありましたが、ここ県内では例年より少なめかなと思われる積雪量。

集合場所の駐車場はきれいに除雪され、風も無く予報では終日曇

り、この時期としては暖かい。曇りとは言え、目の前の低山や山頂部まで望める登山日和と言える。

参加予定のメンバーが靴を忘れ戻った、との事。連絡を取り合い、時間を多少ズラして出発することを伝えて 8 時 30 分、車道を歩きだす。9 時 00 分、登山道入り口。ここでカンジキを装着して準備中、戻ったメンバーが合流。9 時 10 分、尾根上の 568m 点を目指して雪面を歩きだす。以前はスギの植林で眺望はゼロであったが伐採され、三方倉山、磐司岩、大東岳、野尻集落が箱庭のように一望できる場所となった。

▲尾根をめざし樹林帯の中を登っていく

雪の量は少なめ、途中の急斜面にカンジキも流れだし、踏ん張るのに一苦労。先頭を交代しながら 10 時 55 分、尾根に出た。地図上の 568m 点より 150 ㍍ほど東にそれた場所に到達。この頃になると頭上には青空も現われ、本砂金川の対岸に桐ノ目山、三森山、その背後に泣面山が見える。

10 分ほど小休憩の後、山頂に向けて出発。11 時 30 分、鷹ノ巣山の山頂着。昔は手作りの標識などあったが、朽ち果てたのか見当たらず、今は積雪の状態や雰囲気などから判断し、周りを見ると標識を固定した紐類があるだけ。ここでゆっくりと昼食しながら互いの“老”を励まして楽しんだ。傑作の話題は医師である会員が足を“つって”、千石さんが薬を処方したとの事。

12 時 10 分、下山のため東に延びる尾根を辿る。右手には三森山、桐ノ目山の間にオボコンベが見えるが、場所が悪く不遇な山である。でも、この山を持ち上げてくれる会員がいる幸せな山にも思える。

▲暖かい風が吹き上げる風穴の場所

山頂から 50 ㍍も高度を下げた肩

のところから北方の枝尾根へ、小さな雪庇に注意しながら下る。もう駐車場が見える。途中、“えっ！　ここだけ雪が無い！”。広さ 10 畳くらいの石積み斜面が風穴の場所である。石の隙間から微かに暖かい風が吹き上がっているのが判る。

夏は涼しいのだろうと思いながら最後のイノシシ対策の金網を越え、13 時 45 分駐車場に無事下山。先に降りていた細川会員の熱い紅茶を頂き、14 時 00 分現地にて散会とした。　〈報告者：佐藤昭次郎〉

（５）早春山行（白沢五山）

実施日　令和 5 年 3 月 25 日（土）

山　名　白沢五山〈函倉山・前山・岩垂山・小塚（森）山・大森山〉
仙台市青葉区宮城地区

コース　広瀬文化センター駐車場（9:00 集合）～白沢（函倉口）から入山（９：30）～函倉山（10：10）～函前の辻～前山（10：50）～五郎山（11：30 昼食 12：00）～五郎峠～岩垂山（12：30）～べこ尾根頭～小塚山（13：00）～馬の神峠～大森山（13：30）～馬の神峠～大針口下山（14：00）
15：00 解散：広瀬文化センター駐車場

参加者　会員＝遠藤幸壽（ＣＬ）、千石信夫（ＳＬ）、佐藤昭次郎、草野洋一、加藤知宏、準会員＝八尾寛、支部友＝村上敏郎、津久井宏、鳥田伊志、白井浩、山元町山歩き愛好会：今村貞行、一条勝人、計 12 名

▲函倉山頂で地元の佐藤さんが標柱を説明

当日の朝、天気は曇天。山に雲がかからないように祈りつつ出発しました。下山口（大針口）に車を 1 台残置し、車両 3 台に分乗した 12 名は、登山口の上愛子小学校近くに駐車。入り口の白沢口（小さな手作り看板）から、函倉山（349m）へ向かいました。

陽射し無し、風なし、景色なし

(春霞で)の中、しっかりした踏み跡と地元の方の案内で、ほどなく山頂へ。上愛子小学校児童の、遠足の記述がありました。また、頂上直下ですれ違った 25 人程の団体は、「女性と年寄りが多いんだから、追い抜かないでね」と言い残して前山方面へ下っていきました。尾根道を五郎山方向に向かい、函前の辻で左折し、前山(346m)へ。徐々にショウジョウバカマやカタクリの山野草が現れました。

▲函倉山頂での集合写真

前山は顕著な頂は無く、標識の所まで平坦な道が続く。前山の山頂からは愛子方面の景色が徐々に見えはじめ、視界が開けてくる。函前の辻まで戻り、五郎山は間もなく。五郎山は白沢五山に入っていないが、視界の広がる広場がある頂上で早目の昼食となる。メンバーは各々持参したお弁当を広げ、白澤カルデラの話題に弾んだ。「600 万年前に出来たカルデラ湖の、堆積層の中心部の硬い部分が残って白沢五山が形成された」と、メンバーから説明がありました。

お腹を満たした所で、岩垂山(348m)へ向かう。五郎峠の分岐は注意を要する。幅広の道から、左へ脇道に下りて行く。幅広の道は秋保の二ノ輪山(鈴の辻)への道。岩垂山へは尾根道となり、対岸に前山を眺めながらの山行で快適だ。この辺りのカタクリは、まだ花が付いていない。岩垂山山頂は林の中で、新緑の頃には視界が無くなる。

▲函倉頂上近くに咲くショウジョウバカマ

次の小塚(森)山へは岩垂平・べこ尾根の頭へと進む。そのころには霞が薄れて、戸神山や秋保の大倉山が手に取るように眺められる。笹薮が多くなってくると、左へ小塚(森)山(345m)への標識が矢印で示される。小塚山へは間もなくで、林の中に小さな標識がお迎え

してくれる。足元一面にカタクリの群生だ。

頂上から少し戻り、左に「馬の神峠」への分岐を下る(急坂)と、登山道を横切り、50㍍下りで峠の標識と十字路に出る。大森山(364m)へは真っ直ぐ進む。この辺りではカタクリの花が咲いていた。急坂を10分ほど登ると、突然視界が開ける。ゼオライト採掘場だ。頂上まで採掘が進んでいる。大森山は東西で全く違う様相を呈している。東側は頂上まで採掘運搬用のダンプ道が通り、ブルドーザーが唸りを上げていた。

▲前山山頂での集合写真

▲大森山山頂での集合写真
眼前にはゼオライト採掘場が広がる

気を取り直して、今登ってきた道を下る。馬の神峠の十字路を右折すると、すぐ石塔がある。そこからは登山道で、沢筋を一気に大針口へ向かう。所どころ道は崩れているが、迷うところは無い。杉林の入口の「イノシシ除け用柵」を出た所に大針口の標識があり、残置した車が待っていた。ドライバー3人を上愛子小学校まで送ってもらい、車を回送して、メンバーを広瀬文化センターまで乗せてもらった。今回の山行では、遠景に蔵王や大東岳、泉ヶ岳、船形山などを眺められず、次回持ち越しとなったが、全員怪我やバテた様子もなく、無事予定時刻前に解散することが出来た。　〈報告者　遠藤幸壽〉

《付記》

6月26日に予定した「露払い山行」は、二口街道（二口峠）の古道調査に変更。また11月27日に予定した「初冬山行」は参加者が無く中止とした。

【公益事業山行】

（１）第 10 回親子登山教室（深山）

実施日　令和４年６月４日（土）

山　名　深山（287m）　亘理郡山元町

コース　登り：深山少年の森・駐車場～駒返しコース～深山、下り：山頂～鷹討ちコース～深山少年の森・駐車場

参加者　会員＝千石信夫（Ｌ）、冨塚和衛、草野洋一、鳥田笑美、横山哲、千葉正道、佐藤昭次郎、太田正、支部友＝鳥田伊志

公募参加者＝小野木弘志（親）、小野木晴馬（小学２年生）　以上 11 名

今回はコロナの感染の影響もあり、仙台からの参加者１家族２名となった。予定通り深山山麓少年の森駐車場に集合した。宮城支部からはサポートメンバーの山行集会委員会、女性委員会、そして支部友会員も参加となった。千石支部長から主催者挨拶、参加者の紹介、そして登山コースの概要や１日の行動予定、注意点などを説明した。そのあと準備体操など体を整え出発した。

深山神社に参拝し、駒返しコースの登山コースに入る。天候は前日まで雨だったが、当日は好天に恵まれ快適な行動ができた。参加された親子は、登山経験はないとのことなので、時間は気にせずゆっくり歩くこと、また小まめに休憩をとるように心がけた。

中腹あたりではスズメバチが飛んでいて、小学生の参加者は大変怖かったとの感想を日記に書いたそうです。スズメバチ注意の看板が数ヶ所設置されているが、スズメバチの活動期は特に７月から秋にかけて活発になるので、秋の親子登山には、特に注意が必要となる。春の開催時期については、もう少し花などが咲いている時期を選ぶようにすれば、植物などにも興味を持ってくれるようになるのかと感じた。

小学２年生の男子は体力的には問題なく元気に歩いてくれた。山頂では大きな声で雄叫びを上げて喜んでいたことが印象的だった。山頂からは、東は太平洋、西は蔵

王連峰、遠くは吾妻方面も眺められた。山頂からは鷹討ちコースを下山し、無事麓の駐車場に到着。記念撮影し、場所を移動した。

山元町鷲足地区にある千石宅にて昼食をとった。女性委員会の鳥田笑美さんは、深山には登らず、特製の豚汁を調理していただいた。全員がお代わりするほど美味しかった。太田会員からは自家栽培のソラマメの差し入れがあり、早速炭火で焼いたりと楽しい昼食となった。

昼食後には参加者の親子に、山の道具を展示し、使い方などを説明した。展示品には、ワカンジキ（高橋功さんが所有していた桧枝岐の古いワカンなども展示)、ピッケル（グリベル２本、シャルレスーパーコンタ、シモンなど)、雪山用スコップ、ハンマー、ハーケン（古いもの)、アイゼン（門田の古いアイゼンと新しいＣａｍｐのアイゼン）など、山で使用する道具を展示し、その使い方の説明を行った。親子で興味を持って展示品を手にしたり、触れたり体感し学んでもらうことができた。そのほかにはロープの結び方を一つでもマスターしてもらうように、８の字結びを体験してもらった。参加者のお父さんは頭を捻りながら何とかマスターされたようだ。参考までにクローブヒッチ、ムンターヒッチも紹介した。

講習会の最後に、小野木晴馬君に深山登頂証明書を授与し、最後まで諦めずに歩きとおしたことを称えた。

講習会での展示品は、若干骨董的な古いものもあったが、厳しい山を登るためには、いろいろな道具や装備が必要なことを学んでもらうことができたと感じている。ご協力いただいた皆さんに感謝し、親子登山の報告といたします。

〈報告者：千石信夫〉

（２）第９回登山教室（北屏風岳）

実施日　令和４年７月10日（日）

山　名　南蔵王・北屏風岳（1825m）

コース　遠刈田温泉・公民館駐車場（7：30）＝分乗して登山口に移動～南蔵王登山口（8：20）～前山（9：05～15）～杉ヶ峰（9：40～50）～芝草平（10：10～25）～北屏風岳（11：15～12：00＝昼食）～芝草平（12：30～13：00）～杉ヶ峰（13：20）～前山ガレ場（14：00）～南蔵王登山口（14：30）～公民館駐車場（15：30）　解散

参加者　会員＝草野洋一（L）、千石信夫、冨塚和衛、冨塚眞味子、佐藤昭次郎、細川光一、横山哲、支部友＝村上敏郎　計８名、一般参加者＝松橋尚子、小野寺和江、一条勝人、今村貞行　計４名　合計 12 名

第９回登山教室を南蔵王・北屏風岳で開催しました。一般参加者４人、山岳会８人の計 12 人が公民館駐車場に定刻集合。2 台に分乗して登山口へ。日曜日で登山口に駐車できるか心配だったが、幸いに駐車することができた。

参加者紹介と準備体操をして出発。コース沿いにシャクナゲが咲いていて、好天に恵まれ、振り返ると刈田岳がくっきりと見ることができた。予定通りのコースタイムで北屏風岳に到着した。山頂からは周囲の山々を十分に展望することができました。予定では芝草平で昼食の予定だったが、ここで昼食をという声多数で、意見一致。

下山は往路を使って登山口へ。芝草平で 30 分の大休止をとり、湿原地帯をゆっくり観察。眼前の蔵王連峰を見ながら下山しました。

▲杉ヶ峰山頂

北屏風岳山行は令和２年 10 月に秋季山行として登りましたが、この時は出発から下山まで雨中山行となり、期待していた紅葉を見ることができませんでした。今回は出発から解散まで晴天に恵まれましたが、公民館から自宅に帰る車中で雷雨に見舞われ、もう少し遅れたら雨中下山になるところでした。

〈報告者：草野洋一〉

（３）第 11 回親子登山教室（深山）

実施日　令和４年 10 月 16 日（日）

山　域　深山（287m）　亘理郡山元町

コース　登山口～深山神社～一服坂～駒返し～お太鼓峠～深山（駒返しコース往復）

参加者　会員＝千石信夫（L）、冨塚和衛、冨塚眞味子、草野洋一、鳥田笑美、支部友＝鳥田伊志、計６名、公募参加者＝小野木家父子２名、根本家

父子２名、東野家両親２名子供２名、計８名、お手伝いで千石会員夫人、合計 15 名

春に続き亘理郡山元町にある深山（287m）にて、10 月 16 日（日）秋季の親子登山を開催した。仙台在住の３家族、親４名、子供４名の参加があり、秋らしい天候の中、快適な登山を楽しんだ。支部会員の参加者は、支部友会員を含め６名の参加者となった。

▲深山神社にて安全登山を祈願

「深山山麓少年の森」駐車場に午前８時に集合し、開催にあたって支部長から参加者への挨拶、及び宮城支部会員の紹介を行い、そして参加者それぞれに自己紹介をしてもらった。一日の予定やコースの説明、注意点などを話し準備体操後、登山を開始した。登山口にある深山神社にて安全登山を祈願し出発。春の親子登山の反省から行程を短く変更して、駒返しコースの往復とした。

子供たちは春に比べて人数も多くなり、初対面でもお互い交流しながら、楽しく最後まで元気に歩き通した。ゲーム好きな子、昆虫に興味がある子など様々だが、自然に親しんだことは、子供たちに意義ある体験になったのではないかと感じることができた。

▲中腹にて休憩、太平洋が望めた

山頂からの眺望は、太平洋方面、角田市方面などは眺められたが、蔵王連峰などの遠方の山々は残念ながら見ることができなかった。家族ごとの記念写真を撮り、そしてまた子供たちがシャボン玉を飛ばして楽しむなど、それぞれの親子の山歩きを体験した。下山時には足どりも軽く無事、麓の駐車場に到着した。その後、昼食の会場に移動。

▲テントを楽しんでいる様子

宮城支部女性委員会が、宮城風の芋煮汁（みそ味、豚肉、里芋、キノコ、野菜など）を美味しく調理してくれた。特に新鮮な里芋なので、大鍋で作った汁がほとんど残らず、どんぶり3杯も召し上がった方もおられたようだ。食後、春の企画と同じように登山用具を説明し、ロープの結び方などを勉強した。また事前に設営したテント3張の中に入って、テントの居住空間を親子で体験してもらった。

最後に、支部長より一生懸命歩いたことを称え、深山登頂証明書を子供たち4名に授与した。参加された親子からは、このような企画なら来年も参加したいとの声が多かった。5月の連休ぐらいに企画すれば筍の時期にも重なるので、さらに楽しく出来そうな手ごたえを感じる親子登山となった。

〈報告者：千石信夫〉

（４）第10回登山教室（北泉ヶ岳・泉ケ岳）

実施日　令和4年11月13日（日）

山　域　北泉ヶ岳（1253m）～泉ヶ岳（1172m）

コース　オーエンス泉ヶ岳自然ふれあい館駐車場～水神～三叉路～北泉ヶ岳～三叉路～泉ヶ岳～滑降コース～お別れ峠～駐車場

参加者　会員＝冨塚和衛（L）、冨塚眞味子、草野洋一、佐藤昭次郎、細川光一、遠藤幸寿、支部友＝鳥田伊志　計7名

公募参加者＝岩渕利秋、山道聡、川村裕信、八尾寛、白井浩、武田昭子、千葉美江子、伊藤竜介、北田みちこ　計9名　合計16名

午後から天気が大崩れする予報の中、第10回を数える登山教室を、仙台市民にも親しまれ、また仙台市の名誉市民でもある日本アルピニズムの草分け・槇有恒が愛した北泉ヶ岳・泉ヶ岳をフィールドに実施した。

集合場所のオーエンス泉ヶ岳自然ふれあい館前の駐車場に、参加者16名が8

▲水神碑前にて

時前に全員集合。グループを一般参加者 3 名、支部会員等 2 名編成の 3 班に分ける。リーダーからコースを簡単に説明した後、先ずは水神を目指して出発する。時刻は 8 時 20 分。落ち葉を踏みしめながら緩やかな登山道を 30 分程歩き、一休みし呼吸を整える。周囲の木々は、すっかり葉を落とし冬仕度のようだ。

一息ついたところで水神碑を目指す。この碑は泉ヶ岳の山名の由来とも言われており、樋沢(ひざ)川源頭部の近くにある。ここで 2 回目の休憩を取る。時刻は 9 時 10 分。休憩の時間を利用して「登山教室」を開く。

9 時 20 分に水神碑を出発。樋沢川の源頭部を右岸に渡り、北泉ヶ岳への登山道に取り付く。ブナの原生林に覆われた急坂をユックリと参加者の足並みを見つつ三叉路に向かう。水神碑から 50 分ほどの行程。ここで大休憩。

風が強くなってきたこともあり、ここで昼食を摂ることにした。数名がザックをデポしたいという事なので、その留守居を細川会員が引き受けてくれたのでお願いして北泉ヶ岳の山頂を目指す。ブナ林の中を一旦下り泥濘を過ごしてからは登山道に張り出す根っこに気を付けながら右手に泉ヶ岳を見つつ登り詰めていくと北泉ヶ岳の山頂に辿り着いた。時刻は 11 時過ぎ。

北泉ヶ岳からは三峰山(1418m)、蛇ヶ岳(1400m)、そして船形連峰の盟主・船形山(1500m)へと稜線伝いに登山道が続く。

北泉ヶ岳の山頂は視界が利かない。風も吹き荒んできたので写真を撮り、早々に来た道を 30 分程掛けて三叉路に引き返すと、笑顔の細川会員が「ご苦労さん」と迎え

▲北泉ヶ岳山頂にて

てくれた。

落ち葉で敷き締められた三叉路で昼食タイム。思い思いの手作り弁当に舌鼓を打つ。食事時間を利用して2回目の「登山教室」を開く。内容は日本山岳会と宮城支部についてのあらまし。

▲北泉ヶ岳をバックに泉ヶ岳へ

12 時 10 分、泉ヶ岳山頂を目指して三叉路を出発。緩やかに北泉ヶ岳と泉ヶ岳の鞍部まで下り、泉ヶ岳の頂へと登り返す。頂上に近づくにつれて視界が開けてくる。振り返れば登ったばかりの北泉ヶ岳の姿が、また南西には宮城を代表する山々が一望のもとだ。ここで佐藤昭次郎会員から宮城の山々を説明してもらう。

暫し、宮城を代表する山並みを堪能してから泉ヶ岳の頂へと足を運ぶ。13 時に山頂到着。何時もは登山者で賑わう山頂だが、天気予報が影響したのか登山者の姿は少なかった。

山頂に転がる石に腰を下ろして休んでいると、天気予報が当たったようで雲行きが怪しくなってきた。早々、下山を始める。下山路は滑降コースに取る。

泉ヶ岳山頂から水神コースを右に、表コースを左に分け、南の方向に位置する滑降コースは、仙台市内小学校 5 年生の泉ヶ岳登山で登ってくる登山道だ。カモシカ･コースを左に分けると急な下りになる。登山道は根っこが張り出し、石や岩が重なり合って歩き難く危険も伴う。一般参加者の中には登山経験が乏しい方も居られたので、声を掛けながら時間をかけて急場を凌ぐ。「大壁」を過ごし、見返り平まで下れば、もう心配ない。お別れ峠を過ごし、泉ヶ岳ふれあい館に着いたのは 14 時 40 分。全員無事の下山となった。

▲泉ヶ岳山頂

下山後、一般参加者から今回の登山教室の感想をお聞きしたところ、多くの方々から高評価をいただいた。特に班を編成しての山行は、会員等から山の話を聞けたし、またいろいろと質問も出来たので大変良かったとの声もあった。

〈報告者：冨塚和衛〉

2022年度の山行記録を振り返ると、前年度同様に新型コロナ感染の状況を見ながらの支部活動となった。

共益事業山行は新型コロナ感染防止を図りながら、一部の計画が未実施となったが、ほぼ計画通り実施することができた。ただ、越境する夏山登山については今年度も中止とし、県内での山行とした。参加者の延べ人数は45人で、年度を追うごとに減少傾向にある。

公益事業山行は、一度も実施できなかった前年度とは打って変わり、「親子登山教室」、「登山教室」とも予定通り実施することができた。登山に興味を持つ親子を対象にした「親子登山教室」は2回実施、参加者は合わせて17名。一方、登山に関心のある一般県民を対象にした「登山教室」も2回実施、参加者は合わせて24名であった。この公益事業の2つの教室は久方ぶりに実施したにもかかわらず、それぞれ工夫を凝らした結果、参加者より高い評価を受けた。

尚、仙台市内の小学校5年生を対象とする公益事業の「泉ヶ岳登山支援事業」は、オーエンス泉ヶ岳ふれあい館と連携を図り、実施する8校に対し支援ボランティアのとして延べ会員10名が参加した。

2022年度 山行事業以外の宮城支部活動記録

■全国山岳古道調査

日本山岳会創立120周年記念事業「全国山岳古道調査」は、5月17日に本部と古道オンライン会議が開かれた。その結果「日本の山岳古道120選」が決まり、宮城支部担当は「栗駒古道」「出羽仙台街道」「関山街道」「二口街道」「蔵王古道（蔵王山の信仰の道)」の5ヶ所となった。

□第2回山岳古道調査特別委員会（会場：仙台市シルバーセンター会議室）

期　日　令和4年5月18日（水）

出席者　冨塚委員長、千石、草野、佐藤、遠藤、加藤、鳥山、以上7名

本部との会議を受けて翌日に開催。これまでの経緯が報告された後、宮城支部としての進め方を話し合った。6月より実地調査に入ることを確認、併せて関係する役場､教育委員会をはじめ､地元団体などに協力依頼することにした。

□山岳古道現地調査 報告

○二口街道調査（報告者：千石信夫）

実施日　令和4年6月26日（日）

集　合　野尻番所跡　駐車場

参加者　高橋二義、冨塚和衛、千葉正道、太田正、千石信夫、以上5名

昨年は、二口境目番所跡から上部、清水峠まで調査を行ったが、今回は下部の方を調査することにした。野尻番所跡にある秋保足軽紅重という樹齢270年の桜の木を確認、オオヤマザクラが突然変異したとされ、2年前に新種と認定された。花の写真は来春に撮影することにする。その後、野尻に残存する足軽屋敷や石碑などを見て写真に収めた。

▲二口渓谷

秋保ビジターセンターまでは車で移動し、その後は歩きながらＧＰＳの軌跡を記録し、途中の石碑やキャンプ場の施設、姉滝などを確認。磐司橋の水場を過ぎたとこ

ろで、高橋会員が踏査している古道に入る。所々に石が積まれて残っているところを確認しながら歩く。途中で迷ってしまうような状況である。間もなく林道に戻り、白糸の滝入口で休憩。

朝から好天となり、季節外れの高温に悩まされ汗だくとなっての調査となった。間もなくゲートがあり、車は進入禁止となっていた。ゲートからは、林道上部の展望台までの間を歩き、軌跡を記録し調査終了とした。

○栗駒古道調査（報告者：加藤知宏）

実施日　令和 4 年 7 月 23 日（土）～24 日（日）

集　合　湯浜温泉

参加者　千石信夫、千葉正道、冨塚和衛、加藤知宏、以上 4 名

日本山岳会では創立 120 周年記念事業として、全国で古道調査を行っているが、宮城支部でも幾つかの古道調査を目下行っているところである。そのうち「栗駒古道」の現地調査を、令和 4 年 7 月 23 日（土）から 24 日（日）にかけて行った。

今回の現地調査は、湯浜温泉をスタートし、クロベ巨木の森を経由、世界谷地駐車場をゴールとするルートで行った。23 日、湯浜温泉から調査を開始した。歩き始めてすぐ出会う母沢（一迫川支流）の美しい渓流、優美な湯浜の上滝、ランプの宿として有名な湯浜温泉・三浦旅館の露天風呂などに心が弾む。

登山道は全体的に勾配が緩く、整備が行き届いている。迷いやすい箇所や危険な箇所は殆んどない。白桧沢という 1 つ目の沢を渡渉後、雨足が強くなり、間もなく土砂降りとなった。湯浜コース分岐から間もなく相ノ沢という 2 つ目の沢を渡渉する。雨量が多かったが、何とか渡渉できた。八沢という小さい 8 つの小沢があるエリアを越え、3 つ目の小桧沢という大きな沢を渡渉するはずだったが、沢の増水が激しく渡渉は困難と判断し、この日の山行継続は取り止め、来た道を戻った。

この日の宿は、新湯温泉くりこま荘だった。宿のオーナーで郷土史家である菅原次男氏に栗駒古道の歴史や義経伝説などヒアリングを行い、貴重な話を聞くことができた。

24 日、天気も回復し、世界谷地駐車場から調査を再開することにした。世界

谷地第一湿原、第二湿原を越えて大地森分岐点へ向かう。ここには江戸時代に「お助け小屋」と呼ばれる、今で言う長屋作りの宿泊地があった。現在は登山者の休憩場所としてテーブルと椅子が備え付けてあり、当時を偲ぶ石碑がある。

▲新湯温泉くりこま荘にて

その後、大地沢という大きな沢及び巨木の森入口を越えて、昨日引き返した小桧沢まで行き昼食をとる。その後、巨木の森入口まで引き返す。ここには“千年クロベ入口”という標識があり、千年クロベに向かう分岐道がある。分岐道の先にある木桧沢 2 号橋を渡ると平坦な林道が続き、その先に「千年クロベ」と呼ばれるクロベ（ヒノキ科）の巨木があり、そのどっしりとした姿を目に焼き付け、世界谷地駐車場まで引き返した。

今回の調査は、途中豪雨に見舞われるというハプニングがあったが、全行程を調査することができ、菅原氏からも貴重な話を聞くことができ、実りある調査だった。今回の結果も踏まえ、古道調査を完遂したいと思う。

○蔵王古道調査（報告者：佐藤昭次郎）

実施日　令和 4 年 8 月 27 日（土）

集　合　遠刈田温泉・公民館駐車場

参加者　千石信夫、冨塚和衛、遠藤幸壽、佐藤昭次郎、以上 4 名

実施日の 8 月 27 日前日まで雨のぐずついた天気でしたが、参加予定の千石、冨塚、遠藤、佐藤の 5 名が、集合場所となる遠刈田温泉の公民館駐車場に集まりました。

今回は“蔵王古道の会”が主催する「蔵王御山詣り」第 9 回目の公募行事です。ここへの参加は、日本山岳会が取り組む古道調査にご理解いただき、特段の配慮とご協力をいただき無事調査する事が出来ました。何せ観光道路（エコーライン）を何度も横断するコースなので、車への対応などスタッフが揃わないと、スタートの刈田嶺神社里宮から刈田嶺神社奥宮まで、古道コースとして

のＧＰＳ軌跡の収録が難しく、この企画に合わせての調査となりました。

古くは修験者が利用し、その後各地に残る「〇〇御山詣り」と称する山岳信仰が続いてきた山で、ここ宮城では蔵王山詣りとなる。1960 年代に観光道路の開通で、半世紀以上忘れ去られた道を、有志（蔵王古道の会）が集まり復活させた古道である。

調査参加である我ら 4 名も、90 名を超える参加者の隊列のほぼ中間に配置され、先達組と言われる各班のリーダー役が神官からお祓いを受けた後、午前 6 時 30 分刈田嶺神社里宮の鳥居を出発。

我々も手持ちのスマホのアプリを作動させて後に続く。コース上に度々出てくる観光道路（現在の県道白石・上山線）の横断には、“蔵王古道の会”の役員が手際よく車を制してくれて順調に、しかも往時の面影のある場所や、史跡となっている場所で説明をしてくれる。そこでスマホのカメラシャッターを押す作業となる。一般参加者の多いこの企画ですから、ゆっくりと・・・だが、麓から山頂までの距離は実際長いので、このコースを歩くには相応の体力と時間を必要とする。

歩き始めて 3 時間、不動滝駐車場で休憩、水とバナナを頂戴するなど、我々もそのおこぼれに授かる事に。先はまだまだである。もう 5 時間ほど歩くと澄川のスキー場である。この辺りに来ると、朝のどんよりとした雲も薄くなり、ここで“昼食！”の号令で調査隊はゲレンデにて昼食とした。

英気を養い山頂へ。この先、山岳信仰の古道特有の霊場と言われるだけに、賽の磧や三途の川などの説明を受けながら、ゆっくりとした歩みを続ける。この辺りに来ると頭上には雲もなくなり時折日が差す。ここから上部は時折視界が広がり、ハイキング的な山旅となる。

蔵王の御山参り（昭和初期の絵葉書）

里宮を出発してから既に 7 時間、大黒天に到着、適度な疲労感と最後の登りを目の当たりにして、スタッフが用意してくれた“力水”を頂戴し重い足を上げる。急坂が続くなか隊の先達が“ザンゲ、ザンゲ”の声、

それに続き参加者の“ロッコンショウジョウ”の声。それが前後の各隊から聞こえる。まさに往時を思い起こさせる。

午後 2 時 44 分、無事目的の刈田嶺神社奥宮に到着し、我々も調査終了。アプリの電源を切り“蔵王古道の会”が準備したバスに同乗させていただき出発点へ。古道の会のご厚意で楽しい調査山行を終了しました。

□第 3 回山岳古道調査特別委員会（会場：仙台市シルバーセンター会議室）

期　日　令和 4 年 11 月 3 日（木）

出席者　冨塚委員長、千石、高橋、佐藤、遠藤、細川、加藤、鳥山、以上 8 名

古道担当の各チーフより、これまでの調査の進捗状況を報告した。

① 栗駒古道（加藤委員）: 7 月 23、24 日にかけて現地調査を実施。新湯温泉くりこま荘のオーナーで郷土史家である菅原次男氏から貴重な話を聞いた。ＧＰＳ軌跡を除き、ほぼ提出資料は揃った。

②出羽仙台街道（冨塚委員長）: 大深沢の橋が大雨による崩壊で通行できず、調査は止まっている。来年の雪解けを待って調査する。

③関山街道（遠藤委員）:「関山街道フォーラム」の資料を使うこと了解を得る。写真は資料に沿って撮影する。あとはＧＰＳ軌跡を添付すれば出来上がる。

④二口街道（千石委員）: 6 月 26 日に野尻番所跡から白糸の滝を経由、林道上部の展望台まで歩きＧＰＳ軌跡を記録した。「関山街道フォーラム」の方々にも協力をいただき、また山形支部からも資料の提供があった。秋保ビジターセンターから清水峠まで軌跡はとれたが、そこから先はこれから。

⑤蔵王古道（佐藤委員）: 8 月 27 日「蔵王古道の会」主催の第 9 回“蔵王御山詣り”に参加した。この会に 20 年にわたって調査した資料がある。ＧＰＳ軌跡をとったので、この「蔵王古道の会」資料を参照して作成すればメドがつく。

この後、委員の間で今後の作業の進め方を意見交換した。出遅れている「出羽仙台街道」を除き、テンプレートをまとめ完成をめざすことにした。

□第 4 回山岳古道調査特別委員会（会場：仙台市シルバーセンター会議室）

期　日　令和 5 年 2 月 2 日（木）

出席者　冨塚委員長、千石、柴崎、高橋、千葉、遠藤、加藤、鳥山、以上 8 名

古道担当のチーフより進捗状況と今後の活動予定を報告した。
①栗駒古道(加藤委員):テンプレートの未完成部分は、これから確認して記入。ルート写真は悪天候で撮れていない。→会員が以前に撮っている写真を送る。
②出羽仙台街道（冨塚委員長）：4月下旬頃に道路が開通見込みで、5月上旬頃に2日ぐらいかけ実地調査する。テンプレートはタタキ台を作った。今後の調査で修正を加えていく。
③関山街道（遠藤委員）:「関山街道フォーラム」の資料をベースにテンプレートを作成すると、削除する箇所が多く手間取っている。→ＧＰＳデータを送る。
④二口街道（千石委員）: 全体として宮城側の現地調査を終え、今年は山形側を調査する。テンプレートはタタキ台のタタキ台といったところ。
⑤蔵王古道（佐藤委員欠席で冨塚委員長）: テンプレートをまとめたが、まだボリュームが足りない。実地調査は刈田岳から熊ノ岳まで踏査すれば終る。

この後、山岳古道調査の全体スケジュールを話し合う。その中で「出羽仙台街道」と「二口街道（山形側）」を早い段階で調査することと、ＧＰＳに関する地図とルート図ができない担当者に千石支部長からデータを送ることなどを確認した。また、柴崎委員よりルート図はスタート、ゴールだけでなく、その周りの山や歴史に関係する山などを入れるべきとのアドバイスがあった。

■令和4年度 宮城支部ビールパーティー

8月30日（土）16時からＪＲ名取駅前のサッポロビール園を会場に、行動制限のない状況で、久しぶりに対面でのビールパーテイーとなった。隣接する工場直送の生ビールを堪能しながら、一人一人が近況を報告し合った。コロナ禍のため家族に反対され、参加を断念した会員もいたようですが、18時過ぎには十分満足し、全員名取駅から帰途についた。
参加者：千石信夫、冨塚和衛、横山哲、草野洋一、細川光一、宇都宮昭義、千葉正道、鳥田笑美、鳥田伊志、計9名

■令和4年度 宮城支部年次晩餐会

12月10日（土）に予定したが、コロナ感染が拡大し参加者が少なく、晩餐会＆オークションの意義が薄れることなどから中止とした。

2022 年度 宮城支部以外の行事参加記録

（１）第 4 回宮城・山形支部交流会

7 月 16 日（土)、3 年ぶりとなる交流会を蔵王のレストハウスで開催した。参加者は宮城支部 5 名（高橋二義、横山哲、太田正、佐藤昭次郎、冨塚和衛)、山形支部からは鈴木理夫支部長他 6 名の計 12 名。

主に山岳古道調査に関する情報交換を行い、今後とも古道調査で協力し合うことにした。交流会で予定した刈田岳から熊野岳までの交流山行は、生憎の天候で中止。次年度は宮城支部で担当することを確認し解散した。

（２）令和 4 年度 支部連絡会議

12 月 3 日（土）年次晩餐会に先立ち京王プラザホテルに於いて、久しぶりに顔を合わせて開かれ千石支部長と冨塚事務局長が出席した。広島、宮崎、北海道の各支部から活動報告があり、そのあと松田理事から支部保有の宿泊施設などが紹介された。

（３）令和 4 年度 日本山岳会年次晩餐会

12 月 3 日、新型コロナウィルス感染の沈静化で 3 年ぶりの開催となった。吉野淳会長より「2025 年には創立 120 周年を迎える。全国山岳古道調査や山の天気ライブ授業、ヒマラヤキャンプ、グレート・ヒマラヤ・トラバース（ＧＨＴ）などが進行中で、新たなプロジェクトも加わる予定になっている」と挨拶があった。

恒例の新永年会員紹介は、3 年ぶりの開催になったことから、令和 4 年度とともに昨年度、一昨年度に永年会員になった方々の名前が読み上げられた。宮城支部からは、令和 2 年度になられた柴崎徹会員（会員番号 7018)、令和 3 年度になられた千田早苗会員(会員番号 7211)のお二人が永年会員となりました。誠におめでとうございます。

《付記》

全国支部懇談会、東北・北海道地区集会は、何れも新型コロナ感染拡大の影響で自粛、中止となった。

紀行・随筆およびエッセー

九度山（高野山）町石道を訪ねて

冨塚和衛

「九度山町石道」。この道を知ったのは、2022年の3月初旬から4月中旬にかけて、四国八十八ヶ所の礼所を通し打ちで巡拝した折だ。66番札所雲辺寺手前の「民宿岡田」にお世話になった時のことである。泊り客の一人から『巡拝終了後に、高野山奥の院御廟に詣でて、弘法大師に結願報告をするのであれば是非、「九度山（高野山）町石道」を歩いて行かれることをお勧めする。往時を今に伝える趣のある古道だ』との話を聞いたからだった。

平安時代、空海が真言密教の根本道場として開創した高野山は、古くから信仰を集め、この地に向かう道は、今は「高野七口(高野街道)」に集約され山内への取り付き道となっている。そのうちの一つが九度山町の慈尊院から高野山山上の大門へと通じる表参道で、これを九度山(高野山)町石道と称し、開山の折、空海が木製の卒塔婆を建てて道標にした道と言われている。鎌倉時代になって、朽ちた木の代わりに五輪塔の形をした町石が一町(約109m)ごとに建てられた。町石は高さ3㍍30㌢の花崗岩で山上の根本大塔を基点とし、最後が慈尊院石段途中に建つ180町石となっている。さらに大塔から奥の院まで36 町石が続く。現在も梵字が刻まれた町石が残る。天皇、上皇から庶民までが参拝登山したこの道は、まさに祈りの道、信仰の道なのだ。

「九度山」の地名の由来は、域内には高野山の開祖である空海（弘法大師）の母が暮らしていたという慈尊院があるが、空海はこの寺院に高野山から月に9度母に会いに来ていたことから九度山の地名がついたと伝わる。慈尊院は弘法大師御母公のお寺としても知られ、以後、女人禁制の高野に対して、女人高野と呼ばれるようになり女性の参拝客も多いという。

10月初旬に妹と我々夫婦の3 人で九度山(高野)町石道を訪れることにした。

10月6日の一日目は、仙台駅で栗原市に住む妹と待ち合わせ、東北新幹線、東海道新幹線で大阪へ。大阪からは南海電鉄南海高野線で九度山駅へ。駅からは迎えの車で宿の中川旅館へと向かう。一日がかりの移動となった。

二日目は朝から天候が芳しくない。雨具を身に着けて6時に約22㌔先の高野

山を目指して宿を出発する。先ずは慈尊院に足を運ぶ。小雨の中、境内の掃除をしていた僧侶に声をかけ慈尊院のお話を伺った。頂いたパンフレットを基に懇切丁寧に道順や町石道の謂れ等について教示してくれた。町石道歩きはカウントダウンの道だとも教えてくれた。

▲180町石

慈尊院から丹生官省府神社に登る石段の中ほど右手に180町石が建つ。愈々、歴史の道探訪の始まりだ。神社、勝利寺を過ごし、緩やかな登りが続く杉と竹が混じり合う林を抜けると柿園が現れる。和歌山県は富有柿の産地。急斜面を上手に利用した柿園がしばらく続く。柿園に伸びる町石道を行くと展望台に辿り着く。時刻は8時。慈尊院から約40分程だ。ここは、朝日・夕日100選にも選ばれた展望スポットだそうだ。ここからは、明治から第2次大戦後まで3 世代の女性の生きる姿を描いた、有吉佐和子の代表作「紀の川」の舞台となった紀の川が一望できる。

展望台から163町石辺りまでの道は、視界が開け眼下に紀の川平野を見下ろし、和泉山脈を一望できる九度山（高野町）石道屈指の景勝地と言う。景勝の地を過ぎると、愈々、檜を主とする針葉樹林に囲まれた本格的な山道となり、ややきつい登りが六本杉峠まで続く。峠に着いたのは9時15分。峠で一休みする。天気は相も変わらず、霧雨が降り続き樹林帯は靄って行く先が見通せないほどだ。だが峠からは、ほぼ平坦な道となり歩き易くなる。古峠を通過し二ツ鳥居に着いたのは9時50分。雨粒が大きくなって来たので鳥居近くに建つ東屋で暫く雨宿りする。

更に歩を進める。神田地蔵堂、笠木峠を越えて矢立峠に着いたのは11時50分頃。雨がかなり酷くなってきた。車道を叩きつけている。矢立茶屋の軒先を借りて宿で用意して貰ったお握りを頬張りながら雨が過ぎるのを待つ。この矢立は町石道で、唯一高野山へ通じる国道480号が横切る場所だ。昼食を摂っていると短パンの人が近づいてきた。鹿児島県人と言う方の話を聞くと、四国巡礼結願のお礼に高野山奥の院に行くのだという。岡田屋で聞いた話は本当のようだ。

雨が小降りになってきたところで、大門を目指す。弘法大師空海の伝承を伝

える三石（袈裟掛石・押上石・鏡石）に合掌し、大門をくぐり壇上伽藍（根本大塔）に辿り着いたのは14時50分だった。壇上伽藍(根本大塔)の何処かに1 町石が建ってないか探し回ったが中々見つからない。境内のお土産屋さんに居た坊さんに場所を尋ねると案内してくれた。案内してくれた場所は何と車道沿いの垣根の一角。そこには案内板も何もなく、ただひっそりと木陰に佇んでいた。

▲1町石

町石をよく見ると、五輪塔の形をしている。上から宝珠・半月・笠・円・方形を型取ったものだそうで、その由来は、仏教の「宇宙を形成する物質は、空、風、火、水、地の5要素からなる」との教えによると言う。それぞれの意味する梵字が刻まれている。

因みに、この町石であるが180番からカウントダウンしていくと、確かに1番まで欠くことなく建っていた。それに加えて距離を示す理石と言われる石が建っている。それは、144番の1里石、108番の2里石、72番の3里石、36番の4里石である。

高野山には、豊臣秀吉が母の菩提を弔うために創建した金剛峯寺や金堂など多くの堂宇からなる壇上伽藍、奥の院等、世界遺産に恥じない建造物が立ち並んでいる。雨が降り止みそうもない事からそれらの観光は次の機会にと、予約して置いた宿坊普賢院へと身を寄せた。一日雨に祟られた九度山（高野山）町石道歩きだった。

熊野古道を訪ねて～小辺路を行く～

冨塚和衛

2017年4月に伊勢路を訪れた際に認めた紀行文の最後に『《熊野に参るには、紀伊路と伊勢路のどれ近し、どれ遠し、広大慈悲の道なれば、紀伊路も伊勢路も遠からず》私には、「何れの道も甚だ遠き道」だった。次は高野山からの小辺路だ』と記した。あれから5年と半年が経ってしまった。九度山（高野）町

石道に続き小辺路も尋ね歩く計画を立てた。町石道歩きと併せて 1 週間の予定だ。2022 年 10 月 8 日、宿坊普賢院での朝のお勤め後、8 時過ぎに宿を出る。近くのコンビニで昼食などを購入し、いざ出発。一日目の行程は高野山から水ヶ峰を越えて大股までの約 17 ㌔の山旅だ。

普賢院で教えられた道を金剛三昧院へと向かう。院の参道入口に立つ道標に従い、右折して緩やかな坂道を登っていく。15分ほど歩くと大滝口女人堂跡に。そこから檜林のなだらかなアップダウンの道を行くと臼峠に辿り着く。時刻は9時20分。

薄峠から丁石までは下り坂で階段が敷設されているところもある。丁石からも御殿川に架かる赤い橋を渡るまで下りが続く。途中に高野槇の植林があった。高野槇は高野山を中心に仏に供える花の代用として用いられており、名前もこのことに由来するという。

橋を渡ると急な上り坂が車道まで続く。急登の車道を行くと大滝集落に着く。集落はまさしく限界集落だ。集落の外れに東屋が建っている。ここで一休みする。時刻は10時25分。近くには公衆トイレもある。

30分程休んで登りの山道へと足を運ぶ。周囲は将に檜の美林。美林からの精気（ヒノキチオール）を肌身に感じながらの緩やかな登りの山歩きは中々味わえない貴重な経験だ。

▲檜の美林を行く

檜のヒットンチットを楽しみながら、なだらかな坂道を行くと高野龍神スカイラインと称せられる国道371号に出た。時刻は11時45分。ここから暫くは国道歩きとなる。程なくして和歌山県（高野町）とお別れして奈良県（野迫川村）に入る。県境沿いの道を更に進むと大きな案内板が立つ水ヶ峰分岐に辿り着く。ここで国道とお別れし水ヶ峰の頂上を目指して急坂を上り詰めていく。

水ヶ峰山頂には登らずにトラバースすると東屋に着いた。時刻は13時。ここからは下りが続く。今西辻まで下ると林道に合流する。この林道を平辻まで下

る。ここから一旦林道を離れて山道を行く。山道に佇むお地蔵様を見送ると程なくして林道に出る。この辺りは今がキノコの節なのかアミタケ、ハツタケ、ナメコ等が頭を擡げていた。川原樋(かわらび)川が流れる大股に辿り着いたのは14時半。予定より早く着いた。

▲世界遺産らしく立派な道標

迎えの車で今宵の宿民宿「かわらび荘」に到着。荷を解き1 時間程休んでから車で野迫川温泉へ。ゆっくり温泉につかって疲れを癒す。夕食は食堂で。料理は鴨鍋。ご主人の話では、知る人ぞ知るＮＨＫ番組の日本百名山一筆書きで有名な田中陽希氏が、2回宿泊し鴨鍋に舌鼓を打ったとの事。食堂には確かにサイン入りの色紙が掲げてあった。我々以外にも若い男性の泊り客が数名おり、目的は川原樋(かわらび)川での渓流釣りだという。

二日目(10.9)も朝から愚図ついた空模様だ。7時半に宿の車で昨日歩いて来た大股バス停まで送ってもらう。今日は、伯母子(おぼこ)峠越えの大股から三浦口までの約16㌔の行程だ。昨日と違って標高差が登り約600㍍、下りは約800㍍もある。

最初から急な登りが待っていた。朝はまだ体がきつい歩きに馴染んでいない。ゆっくり歩を進めていくと40分程で萱小屋跡に着いた。ここで荒くなった息遣いを鎮めるべく10 分程休憩を取る。

小屋跡からも急登が続く。終わりを告げたのは檜峠を過ぎてから。霧に霞む緑の中を緩やかになった山道をひたすら歩き続けると道標が建つ場所に着いた。

道標は大股、護摩壇山、伯母子峠、伯母子山頂の４方面を差している。高野竜神国定公園内に位置する伯母子岳（1344m）は、日本200名山の一つ。プロアドベンチャーレーサー田中陽希氏が、この山に登った時に泊まったのが大股の民宿「かわらび荘」だったのだと一人納得する。我々は頂上を踏まずにトラバースし、小辺路の道案内に従って伯母子峠に向かった。峠に着いたのは9時55分。峠にはトイレ付きの山小屋が建つ。山小屋に立ち寄り一休みする。

峠から三浦口までは下りの山道となる。ここで十津川村に入る。15分程休ん

だところで、先ずは上西家跡を目指す。がけ崩れを起こし狭くなった場所もあったが、45分程で上西家跡に着いた。時刻は11時前。この跡地は昭和の初めまで旅籠があったという。今は石垣と古木が往時の面影を残すのみだ。そこには静かにトリカブトの花が咲いていた。旅籠の跡地で民宿が用意してくれた特大のお握りで昼食を摂る。相変わらず空はどんよりと曇り、霧が風に靡いている。

上西家跡から一旦尾根の急坂となる。ここを過ごすと後は尾根筋の下りが続く。崖沿いに敷設された階段を降りて行くと、可愛らしい弘法大師像の祠がある水ヶ元茶屋跡に辿り着いた。時刻は12時。

水ヶ元茶屋跡からは、一ヶ所急な上り坂があるものの、後は急な下り坂が続く。侍平屋敷跡の手前に続く霧雨にぬれた石畳の道を下り、九十九折の急坂を下りて行くと三浦口側の伯母子岳登山口に出た。到着時刻は13時40分。大股の宿を出発してから約6時間の山旅であった。

登山口から今宵お世話になる「政所」を探して県道733号を五百瀬集落へと歩いて行く。途中、出会った村人に道を訪ね「政所」に着いたのは14時過ぎだった。予定していたより大分早く着いてしまった。

▲民宿　政所

宿の「政所」には謂れがあった。平家伝説だ。平清盛の孫の平維盛なる者が屋島から逃れ高野山に入り、間もなく那智の海で落命するが、十津川村に残る伝説では、五百瀬に亡命して代々小松姓を名乗り、宝刀小鳥丸を伝えるその屋敷は「政所屋敷」と呼ばれたと。宿の名はここから付けたと女将さんが話されていた。確かに建造物は県の重要有形文化財に指定されている。10年ほど前までは、この伝説を起爆剤に女将さんを中心に地域おこしに取り組み、テレビ番組「人生の楽園」でも放映された過去があるというが、月日が経つにつれ今は山間の寂しい集落と言った印象を拭えない。

三日目(10.10)は、一年で一番「晴れ」の確率が高いはずの体育の日（現スポ

ーツの日）だが、今朝も空模様は芳しくない。7 時に宿を出発する。今日は三浦口から三浦峠を越えて、十津川温泉までの約19㌔の行程だ。標高差は昨日ほどではないが登り約700㍍、下り約900㍍ だ。県道733号を行くと熊野古道の道標がある。少し歩くと三浦口の道標があった。

▲石畳が残る古道

そこを右に曲がり神納川に架かる吊り橋を渡る。橋を渡ると愈々山道だ。石畳が残る古道が現れる。

▲大杉

30分程で、旅籠だったという今は廃墟の吉村家跡に着く。ここからは急坂になる。杉林の中をゆっくり登っていくと、防風林と思われる不可思議な枝葉の伸び方をする大杉がある。胴回り4～8㍍で樹齢500年前後と推定されている。「政所」で見たビデオに映し出されていた大杉だ。

ここからもまだまだ急登が続く。水が湧く30丁石で喉を潤し、三浦峠を目指す。今日も霧雨とのお付き合いが一日続きそうだ。私にとって雨具を着ての山歩きほど嫌なものはない。気がめげて来るのだ。標高1080㍍の三浦峠には9時40分に着いた。林道が横切る峠には東屋や案内板、多くの道標が立つ。人の手が入った花壇のような処も見受けられる。

30分程休憩して歩き出す。ここからは下りの道だ。防護柵のある狭い細い道を抜けて地蔵菩薩坐像が鎮座する古矢倉跡を過ごし、緩やかになった道を下り続け出店跡へ。さらに矢倉観音堂へと向かう。ここで残して置いた政所の弁当で腹ごしらえする。矢倉観音堂から西中バス停へと山道を下る。バス停到着は12時55分。

西中バス停からは国道425号線を十津川温泉まで歩く。十津川温泉の「昴の郷」

に辿り着いたのは15時30分。バス停から約7.5㌔の道のりだが2時間10分も要した。三浦口からは8時間30分の行程だった。

十津川温泉は日本で初めて「源泉かけ流し宣言」を行った温泉地。元禄年間に炭焼き職人が発見したと言われる下湯を源泉とする十津川温泉は、昭和38年に誕生したと言う。2004年6月、十津川村温泉郷の全ての温泉施設において「源泉かけ流し」を宣言。『昴の郷の温泉はとても珍しい加温・加水無しで入浴できる奇跡の温泉。浴場は全て「源泉100％掛流し・加温加水循環無し」という、温泉としては最高レベルの状態で提供』（十津川温泉郷ＣＭより）。「源泉かけ流し」の湯船に身を沈め、地元の食材をふんだんに使った夕食に舌鼓を打ち、一日の疲れを癒した。

四日目(10.11)、熊野古道参詣道小辺路歩き最終日にして、初めて朝から太陽が顔を見せてくれた。特に、この季節の山歩きでは、陽の光は最高のご褒美だ。

7時30分、宿を出発する。今日の山旅は昴の郷から果無峠を越えて八木尾のバス停まで。時間に余裕があれば熊野本宮大社まで歩く予定だ。上湯川に架かる吊り橋を渡り、登山口の道標が立つ登山口に着く。ここから果無峠(1114m)まで、標高差約1000㍍の長丁場の登りとなる。小辺路一の難所だ。距離は約10㌔とそれ程でもないが。

▲果無集落に立つ石碑の前で筆者

登山口から急な登りの石畳道を行くと、昔、茶屋を営んでいたという数件の民家からなる果無集落に辿り着く。その一角に世界遺産の石碑が建つ。ここからは十津川温泉が眺望できる。

果無峠越え参詣道には33の観音石仏が路傍に安置され、参詣者の身の安全を見守るかのように佇んでいる。

果無の集落に別れを告げ、観音石仏を数えながら山道を登っていく。山口茶

屋跡、地蔵菩薩像を過ごし、坂を登り切った処で視界が開ける。ここで一息入れて、さらに急な登りの階段を観音石仏に後押しされながら、やっとの思いで観音堂に辿り着く。時刻は9時30分。お堂には3体の観音像が安置されていると言う。近くには21番観音石仏も鎮座していた。ここには果無峠越えで唯一の水場がある。ホースから流れ出る山の水を心行くまで口に含む。

▲果無峠の17番観音石仏

観音堂からも果無峠までは急登の連続だ。20番、19番、18番と観音石仏をカウントダウンして峠に辿り着いたのは11時20分。十津川温泉を発ってから約4 時間で標高差約1000㍍の山道を登ってきたことになる。登山のスピードと比べるとやや遅いペースだった。

木洩れ日が射す果無峠で迎えてくれたのは、ニコリともしない17番観音石仏。峠は十字路になっており縦走路の道標も立っていた。緑豊かな紀伊山地の縦走はどんなロマンと巡り合えるのか、想像をめぐらしつつ、峠には長居をせず先を急ぐことにした。今日の宿泊地は田辺市の予定だ。観音石仏を数えながら下って行く。ふと気づくと、石仏間の間隔が2倍どころか5倍ほども違う。何故なのか、その理由は私には知るすべもないが、喜怒哀楽の色んな表情をした30体もの観音石仏に慰められたり、叱咤激励されたりと、果無峠越えは小辺路での忘れ得ぬ石仏との出会いとなった。

果無峠からは急な下り坂の連続だ。足を滑らし転ぶこともしばしば。小辺路の参詣道歩きも高野山町石道を含めると5日目。疲れもピークだ。熊野本宮大社がある本宮町が遠望できる30丁石を過ごし、七色分岐を経て八木尾バス停に着いたのは、13時05分。

八木尾から熊野本宮大社までは4.6㌔の道程だ。歩くと1時間30分もかからないが、タクシーを呼んで本宮大社へ向かう事にした。

▲熊野本宮大社

九度山から高野町石道、小辺路を歩き続けた5日間。無事辿り着けたことを熊

野本宮大社に参拝、報告して、この旅は幕を閉じた。次は大辺地からの参詣を告げ、この地を後にし田辺市へとバスに揺られた。

黒伏高原の山　白森

三宅　泰

11月後半ともなると、大きな山は完全な冬山の領域に入る。雪が降る前に、どこか山に登ってみたい。奥山でも里山でもない、ほどほどに新雪が踏める山、そんな山がいい。

ここで、ふっと思い浮かんだのが標高1200㍍台の黒伏山群の一峰、白森（1263m）である。

南壁が断崖絶壁となった黒伏山（1227m）をはじめ、四方、岩に囲まれた怪峰、仙台カゴ（1270m）、黒伏山群最高峰の柴倉山（1276m）等々。これまで当山域内の10座ほどの山に登ってきたが、白森には未だ登っていなかった。

この山は黒伏のいずれかの山に登って初めて見えだす山だ。一つ手前の黒伏山に登るたび、私はその秀麗な山容を眺めては、ぜひ登ってみたいものと思っていた。

11月24日、その白森に登るべく、いつもの遅沢林道から入って黒伏山登山口に着く。先ず、黒伏山の急斜面を登る。途中から今年最初の新雪を踏んで、やがて前面がカラッと開けた黒伏山南壁の真上に着いた。

脚下にはスキー場の広がる黒伏高原、正面遠くに船形山（御所山）を眺めながら左に折れ、幅600㍍、高低差300㍍という南壁のふちをたどって行った先が黒伏山の山頂となる。目の前間近かに白森がそびえ立っている。

黒伏山山頂から眺めた白森と鉢山

休憩後、一旦、黒伏山を下ると周りはブナ林となり、最低鞍部（1142m）は湿原らしく、新雪におおわれた池塘の一部も見えた。

この鞍部から、いよいよ白森山頂を目指した。高木は次第に灌木帯に変わり、四方、見晴らしがよくなってくる。やがて11時15分、

イワウチワが咲き乱れた白森山頂に到着した。

頂上は南北に細長く、稜線上に一本のルートが細々と通っているだけのシンプルなもの。祠とか案内標識といったものが一切ないのも、他の黒伏の山々と同じだ。

山頂からの展望は、“すばらしい”の一言に尽きた。とくに西方、半分以上が真っ白になった月山等、まわりの景観をしばし楽しんだあと、課題だった白森をあとにした。

新会員・新準会員・新支部友　自己紹介

山で一期一会を

八尾　寛

「なぜ山に登るのですか」と聞かれることがあります。「そこに山があるから」というのは、ジョージ・マロリーの有名な言葉ですが、私自身は、どのように答えればよいのだろうかと、迷ってしまいます。だいたい、はっきりとした目的をもって登山しているわけではありません。また、山には様々なイメージが重なり、短く言い表すことができません。

私にとり、山には神仏の領域としての原風景があります。中学生のころ、祖父に連れられ、大峰講修行したことがありますが、これが最初の本格的な登山でした。道中の行場で「ノウマクサーマンダーバザラ」などと真言を唱えながら、表行場と裏行場を回りました。西の覗きでは、岩から吊り下げられ、「親の言うことを聞くか」と問われ、「はい、聞きます」と答えたものです。現在、修行を目的に登山することはありませんが、〇合目と刻まれた合目石をたどって登っていると、六根清浄と唱えたくなります。また、苔むした石仏、小さな祠、巨石や巨木などに出会うと、神妙な気持ちになります。険しい岩場では神仏に試されているように、また、美しいお花畑では労苦が報われたように感じます。

山はまた、挑戦や冒険の場です。現在の私は、青年のころのようなスピード登山やピークハンティングには、さほどの魅力を感じなくなりましたが、歩いた稜線を振り返ると、「はるばる来たものだなあ」という達成感があるものです。昨年 7 月に八幡平を出発し、三ツ石山を目指しましたが、歩き始めたとたんに

雨が降り始めました。初めてのコースを一人で登山していて、誰にも会いません。そんな時には、「このまま進んで大丈夫だろうか」という不安がよぎったものです。雨がさらに激しくなり、松川温泉へエスケープしようかと迷いましたが、弱気を克服し、三ツ石小屋を目指しました。すると、三ツ石山を下り始めたときに、雲がはれ、眼前に岩手山の勇姿が現れました。山ではすべてが自己責任です。進むべきか退くべきかという判断を迫られるのもワクワクドキドキする場面です。

山は憩いの場にもなります。新緑のブナの森で、胸いっぱいに空気を吸いこむと、体中にエネルギーがみなぎり、自分自身が森の一部になります。西川町姥沢から月山に登ることがよくありますが、コンロ、コッヘル、ケトルなどを必ず持参します。さらに、ペットボトルに冷たい湧水を汲み入れると、荷物がずっしりと重くなります。しかし、残雪を眺めながら、広々とした草原で食べるインスタントラーメンの味は格別です。テントを張り、コーヒーを味わいながら、山並に沈みゆく夕日を眺めていると、ゆったりと時間が流れていきます。そして、あたりが暗くなると星を数え、シュラフにもぐり込み、コマドリのさえずりで目を覚ます。こんな時間が永遠に続けばいいなと思う瞬間がありますが、なぜかまた文明社会の日常へ戻ってしまいます。

山には、出会いの場、集いの場というイメージもあります。山では、肩書は不要です。登山中にすれ違う人と、気楽にあいさつを交わします。雄大な自然を前にして、人間やその社会が小さな存在になり、すべての人が等しくなる感覚が生まれるのではないでしょうか。2011 年 3 月の大地震の際、初対面の人とも声を掛け合い、情報を交換しながら、助け合い、日常生活を取り戻していったことが思い出されます。数年前に、知人を案内して秋田駒ケ岳に登ったことがあります。雨風が強く、稜線で吹き飛ばされそうになりながら、励ましあって進み、コマクサの大群落に遭遇しました。この時、知人と感動を共有できた

ことは、素晴らしい体験でした。泉ヶ岳の学校登山にボランティアとして同伴したことがありますが、体力のない子供が集団から遅れがちになります。そんな時、お互いに助け合いながら、全員で共通の難題をクリアする経験をすることで、子供たちが大きな喜びと学びを得てほしいものだと思います。

満天の星空、朝日に照らされる氷原、岩稜に咲く花、鳥のさえずり、湿原を飛び交うトンボの群れなど、山で出会う自然の一つ一つが一期一会です。急坂の喘ぎ、風の涼しさ、谷水の冷たさ、岩場のスリルなど、自分自身の体や心も一期一会の経験をします。そして、人との出会いという一期一会があります。この度、日本山岳会宮城支部に入会いたしましたのも、山での出会いや集いの機会を増やしていきたいという思いに他ありません。そして、大自然に対する畏敬の念、冒険心、感動などを皆様と共有できれば、どんなに素晴らしいことでしょうか。人付き合いのへたな男ですが、何卒よろしくお願い申し上げます。

はじめの一歩

白井　浩

昨年 11 月の登山教室に参加して、友の会会員として仲間に入れていただくことになりました白井浩(しらい ひろし)です。よろしくお願いします。

▲前白根山頂にて

今回、「宮城山岳」の原稿に何を書こうかと迷っていたところ、「山に行くようになったきっかけ」「はじめの一歩」は何だったのかをいろいろ考えて、浮かんできたことを書いてみたいと思います。

「はじめの一歩」は、小学校 5 年生のときに行った、丹沢自然保護協会の実施による「森の学校」だったと思います。そのころ住んでいたのは、東京の町田というところで、家の窓から丹沢の大山、遠くに富士山を見ることができました。「森の学校」は、札掛にある国民宿舎・丹沢ホームの近く、栄光ヒュッテのキャンプ場で行われました。

初めて会う5、6年生の子供たちが、グループに分かれて山の中での活動をします。今のキャンプのように明かりを煌々とつけて、キャンプファイヤーをしてにぎやかなことはしませんでした。そのかわり、夜、林道に5メートルずつ子供たちを座らせて、山の静けさや暗闇を感じる「暗闇教室」、植物観察やシカの糞など、動物の痕跡を求めて山の中を歩いたりしました。

その後、一緒に参加した友達と「ＭＭＢＨＣ」(町田マウンテン・ボーイズ・ハイキング・クラブ)というサークルを作り、月に1回、丹沢を中心に蛭ヶ岳、塔ノ岳、鍋割山などの山に登りました。遠くは尾瀬を縦走して、燧ヶ岳に登った記憶もあります。

▲ＭＭＢＨＣの仲間と丹沢ホームで

山に登るようになって、新田次郎の小説を読むようになりました。「強力伝」「孤高の人」「八甲田山死の彷徨」「聖職の碑」などです。特に「孤高の人」の加藤文太郎さんの影響を受けてその気になり、友達と一緒に家の隣の空き地でビバーク訓練をしようとしました。ところが近所の人に怪しまれ、また寒かったこともあり、途中で挫折したこともありました。

一昨年3月、長年勤めた職場を退職し、少しずつ山を歩きたいなあと思っていたときに、宮城県支部の「登山教室」の新聞掲載が目に留まりました。この登山教室で北泉ヶ岳、泉ヶ岳を歩き、水神の沢の流れ、北泉ヶ岳のブナ原生林の落ち葉のふんわりとした山道、泉ヶ岳に上る途中からの山々の眺めなど、とても楽しかったです。

友の会会員として無理せず、少しずつ山歩きを楽しんでいけたらと思っています。どうぞ、よろしくお願いします。

自費出版紹介

三宅　泰　著「オボコンベ―あの日あのときの山―」

〔金港堂出版部・2022 年 10 月 16 日発行〕

本書のタイトル「オボコンベ」―音声のみ聞くとアフリカあたりの地名かと連想してしまう。著者はこの奇妙な山名に興味をいだき、この山に幾度となく登り続けたという。「オボコンベ」は仙台の奥座敷・秋保温泉郷の奥に鎮座する 595㍍の山である。

先ず表紙を開くと口絵として、著者が描いたオボコンベはじめ 9 点の彩り豊かな色鉛筆画が読者を惹きつける。何れも四季折々の山岳画で本文へのイントロにもなっている。本書は 3 部構成で、最初は「オボコンベ編」。ここで著者は、この山に惹かれた理由と山名の由来を書き留めている。とりわけ山名については麓に残る言い伝えから史実まで調べて論考している。また「オボコンベ」の山容が槍ヶ岳に似ていることから、実際、槍ヶ岳にも登って類似点、相違点などを三宅流にまとめ、対比表まで作成している。“おおよそだが、何れの数字も、オボコンベは槍ヶ岳の 5 分の 1 に当たる”という結論を導き出していることに脱帽してしまう。

次の章「あの日あの時の山編」は、著者が日本を代表する名山をはじめ東北の山、そして地元宮城の山に登行した 23 座の記録が収められている。それぞれの紀行文に、その山にまつわる登山家や作家との関わりが挿入され奥深さを醸し出している。これらの山行にはＪＡＣ宮城支部メンバーのみならず、各地域のＪＡＣ支部や山岳団体の方々との同行があり、著者の交流の広さが窺える。

最後の「エッセー　紀行編」には、硬軟織り交ぜた 10 編のエッセーが綴られ、軽妙な文体に引き込まれる。そのうち地元ゆかりの槇有恒氏が登った泉ヶ岳を

はじめ、お隣り韓国の山への登山は興味深く読める内容となっている。

「あとがき」で三宅会員は、学生時代から長く登山を続けられた要因について―『山を介した良き人とのめぐり会い』であったと述べている。著者は本書のタイトルを決めるにあたり、随筆家でジャーナリストであった石川欣一氏が、自ら愛した雨飾山について執筆した「可愛い山」を参考にしたという。ここに登場する石川氏は、旧制二高（東北大学の前身）山岳会の創立者の一人である。ここでも地元とゆかりのある岳人とのめぐり会いがあったと言える。

さて、あなたが愛する心の山は何でしょうか・・・。　　（鳥山文蔵）

宮城支部 定例事業の概要

（１） 令和５年度 通常総会の開催

これまでコロナ禍により書面開催やメール審議が続きましたが、4 年振りに会員出席による総会、それも山元町にある千石支部長宅での移動総会として開催されました。9 名の出席に委任状 15 名と、会員総数 35 名の過半数を超え、総会は成立しました。

支部長の挨拶のあと、規約により千石支部長を議長に選出、議事に入った。第 1 号議案「令和 4 年度事業報告」を冨塚事務局長より、第 2 号議案「令和 4 年度収支決算報告」を会計担当の千石役員より、それぞれ説明。その後「令和 4 年度監査報告」を会計監事の横山役員が適正であると報告、拍手多数で承認された。続いて、第 3 号議案「令和 5 年度事業計画(案)」を冨塚事務局長より、第 4 号議案「令和 5 年度収支予算(案)」を千石役員よりそれぞれ説明、採決の結果、拍手多数で何れも原案通り承認されました。

今年度は役員改選期となり、千石支部長より第 5 号議案「役員の改選(案)」の説明があった。これまで女性懇談委員を務めた冨塚眞味子役員が退任、新しく山行集会委員として遠藤幸壽会員、メディア委員長として加藤知宏会員が、それぞれ役員として就任、その他の役員はそれぞれ令和 5 年、6 年の 2 期留任することが諮られた。採決の結果、拍手多数で承認された。

令和 5 年度、6 年度の支部役員及び担務は下記の通り（〇印は委員長）

支部長　　千石　信夫　○山行集会委員長、総務・財務委員、会報・編集出版委員、指導・遭難対策委員（遭難対策本部長担当）

副支部長　千葉　正道　○海外・高所登山・医療委員長

副支部長兼事務局長　冨塚　和衛　○総務・財務委員長、山行集会委員、会報・編集出版委員、メディア委員

会計担当　千石　信夫

会計監事　草野　洋一　山行集会委員

会計監事　横山　哲　　山行集会委員

役　　員　柴崎　徹　　○自然保護・科学委員長

役　　員　高橋　二義　○指導・遭難対策委員長、自然保護・科学委員

役　　員　三宅　泰　　会報・編集出版委員

役　　員　佐藤昭次郎　山行集会委員

役　　員　鳥田　笑美　○女性懇談委員長

役　　員　加藤　知宏　○メディア委員長、山行集会委員

役　　員　遠藤　幸壽　山行集会委員

役　　員　鳥山　文蔵　○会報・編集出版委員長

尚、全支部役員は、「指導・遭難対策委員」を兼務担当する。

（２）　月例支部役員会の開催

定例支部役員会を下記の日程で、シルバーセンター5F会議室において開催。令和4年6月15日(水)、9月21日(水)、10月26日(水)、12月15日(木)、令和5年1月18日(水)、2月23日(木)、3月16日(木)。

尚、7月と11月の役員会は、コロナ感染防止のため中止した

（３）　支部会報の発行

支部会報として「宮城山岳通信」及び「宮城山岳」を下記の通り発行した。

○「宮城山岳通信」

第26号(令和4年7月2日)、第27号(令和4年11月3日)、第28号(令和5年3月7日)の3回発行

○「宮城山岳」第26号(令和4年7月30日)

宮城支部収支会計報告

（１）令和４年度　収支決算書

収入の部　　（単位:円）

科　目	当期予算額	当期決算額	増減額	備　考
①　前期繰越金	200,853	200,853	0	
本部から運営交付金	33,000	35,000	2,000	基準会員 31 名＋報奨金
本部から事業補助金	33,000	35,000	2,000	々
補助金・助成金収入	0	0	0	
支部友会費	40,000	33,000	－7,000	8 名（3 名は 2 年分入金）
支部行事参加費	60,000	40,800	―19,200	
雑収入	5,000	6,181	1.181	親子登山深山の会費等
その他	0	1,420	1,420	会議費返戻金
②　収入合計	171,000	151,401	―19,599	
③　総収入（①＋②）	371,853	352,254	―19,599	

支出の部

科　目	当期予算額	当期決算額	増減額	備　考
支払報酬・謝礼金	0	0	0	
旅費・交通費	25,000	15,270	－9,730	支部連絡会議参加
通信費・運搬費	30,000	11,187	―18,813	切手・はがき等
会議費・会場借用費	15,000	11,060	－3,940	シルバーセンター会議室
消耗品費・コピー代	45,000	30,782	―14,218	インク・コピー用紙代
印刷製本費	53,000	40,760	―12,240	「宮城山岳」第 26 号
支払手数料	3,000	770	－2,230	
慶弔費	0	0	0	
雑　費	0	6,710	6,710	古道手ぬぐい購入
その他（上記以外費用）	200,853	15,637	―185,216	登山教室保険料他
資産購入代金	0	0	0	
④　支出合計	371,853	132,176	―239,677	
次期繰越金（③－④）	0	220,078	220,078	

（２）令和５年度　収支予算書

収入の部　　（単位：円）

科　目	前期予算額	当期予算額	増減額	備　考
①　前期繰越金	200,853	220,078	19,225	
本部から運営交付金	33,000	35,000	2,000	基準会員数 35 名
本部から事業補助金	33,000	35,000	2,000	〃
補助金・助成金収入	0	0	0	
会員からの寄付金	0	0	0	
法人からの寄付金	0	0	0	
支部友会費	40,000	24,000	―16,000	8 名
支部行事参加費	60,000	60,000	0	
雑収入	5,000	5,000	0	
②　収入合計	171,000	159,000	―12,000	
③　総収入（①＋②）	371,853	379,078	7,225	

支出の部

科　目	前期予算額	当期予算額	増減額	備　考
支払報酬・謝礼金	0	0	0	
旅費・交通費	25,000	25,000	0	全国支部懇談会
通信費・運搬費	30,000	30,000	0	切手・はがき等
会議室・会場借用費	15,000	20,000	5,000	シルバーセンター会議室
消耗品費・コピー代	45,000	50,000	5,000	インク・コピー用紙代
印刷製本費	53,000	53,000	0	「宮城山岳」
支払手数料	3,000	3,000	0	
慶弔費	0	0	0	
雑　費	0	15,000	15,000	講師宿泊費
その他（上記以外費用）	200,853	183,078	―17,775	予備費
資産購入代金	0	0	0	
④　支出合計	371,853	379,078	7,225	
次期繰越金（③―④）	0	0	0	

編　集　後　記

蔓延を続けた新型コロナ感染症が、季節性インフルエンザと同じ扱いに移行しました。3 年余り続いたコロナ禍から、ようやく普通の日常生活に戻りつつあるようです。

このコロナ禍の中、日本山岳会 120 周年記念事業の全国山岳古道調査が続けられてきました。調査に携わった宮城支部メンバーの方々の話を役員会で聞き、また会報に載せる調査報告を読みますと、100 年前、否それ以上の太古の昔、それぞれの古道を歩いた旅人や巡礼者は勿論のこと、そこに生活する人たちが行き交った時代にタイムスリップするかのようです。この宮城支部の山岳古道調査は、今年大詰めを迎えます。

世の中は非常事態から平常時に戻ります。宮城支部の山行および各行事がコロナ前に戻り、会員、支部友の皆様との輪が再び拡がり、さらに登山を愛好する地元の方々との交流を一層促進したいものです。

公益社団法人　日本山岳会宮城支部会報

宮城山岳　第 27 号

発行日　2023 年 6 月 8 日

発行人　千石信夫

会報・編集出版委員会　鳥山文蔵、千石信夫、冨塚和衛、三宅　泰

事務局　〒983－0821　仙台市宮城野区岩切字畑中 9－12（冨塚宅）

連絡先：ＴＥＬ090－2790－3771

出羽・仙台街道（奥の細道）